

仙台赤門短期大学 看護学科

2020年度（令和2年度）

自己点検自己評価報告書

はじめに

仙台赤門短期大学は2018年4月に開学して以降、3年を経過し、2021年3月に一応の完成を見た。この完成時点を区切りとし、3年間の振り返りを主たる目的として、自己点検を実施したまとめが、本報告書である。点検は、短大内に設置された自己点検自己評価委員会が中心となって実施した。さらに、自己点検報告書を資料として、外部から評価委員をお迎えし、客観的なコメントをいただき、今後の改善のための指針とした。外部委員からのアドバイスをにしたがって、自己点検報告書は、ver. 1 から ver. 2 へ、そして最終の ver. 3 へと改訂を重ねることとなった。本報告書は、外部委員による評価意見を第1部、短大の自己点検報告書 ver. 3 を第2部として構成してある。

報告書の作成、完成に当たっては、外部委員を務めて頂いた公立大学法人宮崎県立大学学長の平野かよ子先生をはじめ、短大の自己点検自己評価委員の先生方、関係の教職員の皆様には、大いなる貢献をしていただいた。特に、各委員会委員長・各プロジェクトリーダーには、それぞれの担当を総括する文書を起草していただいた。ここに深く感謝するものである。

2021年8月

仙台赤門短期大学 自己点検自己評価委員会

第1部 外部委員による評価意見

仙台赤門短期大学 自己点検報告書に対する

外部委員の最終の評価意見

2021年8月9日

外部委員 平野かよ子（公立大学法人宮崎県立看護大学 学長）

1 短期大学完成時点での評価の目的と位置づけ

仙台赤門短期大学（以下、「短大」と略記）は、2018年4月に開学した、看護学科単独の新設短期大学で、仙台市に位置する。短大が自己点検自己評価を行うのは、開学して3年目の2020年冬であり、最終報告書のまとめは4年目の2021年夏である。この評価は、短大が策定した中期計画の1年目である2020年度の実績評価であるとともに、短大が一応の完成をみる3年目の振り返りとしての完成時評価である。この完成年度には、文科省に設置申請した短大の計画内容が達成されたかどうか問われ、その観点からの審査は文科省の担当部署が行っている。

今回の自己点検自己評価は、短大が自らの観点から作成した点検項目に従って、第三者である外部委員を交えた内部質評価の体制の整備を念頭に置き、評価を行ったものである。

2 外部評価者による評価の経緯

まず、学外委員に自己点検報告書 ver.1 が送付された。これを精読し章順にコメントを付しフィードバックしたところ、短大側は加筆修正を行い改訂した自己点検報告書 ver.2 を作成し、再度外部委員に送付された。この自己点検報告書 ver.2 をもととして、遠隔テレビ会議にて赤門短大委員数名からヒアリングを実施した。その結果をもとに短大は自己点検報告書 ver.3 を作成し、最終の報告書を完成させた。本評価は、以上のような経過を経ての、外部委員としての最終見解である。

3-1 短大の魅力と強みの一層のアピール

仙台赤門短期大学は言うまでもなく、私立の学校である。私学が私学である所以は、公立学校とは趣の異なり、自由にして独自の教育理念を掲げ、その達成を通じて社会に有為な人材を育成することにある。当該短大を擁する学校法人は長

らく、東洋医学の専門学校を経営してきた。そこで短大では、その理念の一つに「融和」を掲げ、看護学の中に東洋医学の見識を反映させるべく努めている。具体的には、短大に固有の授業科目（例えば人間学や東洋医学概論等）を設け、教授している。こうした取り組みは、他学には見られない特徴的な魅力であり、短大の存在意義を強調するものである。東洋医学の考え方（全人的な理解と把握、自然治癒力の促進等）を、看護過程や看護計画へ反映する看護が教授され実践されているのであれば、東洋医学との融和の例を積極的にPRするのが良いと思われる。

また、当短大では、地域貢献プロジェクトとして、まちかど保健室を設置運営し、地域の人々の健康を支援し、産官学の連携組織である学都仙台コンソーシアムに参加し講師を派遣している。さらには、日本伝統医療看護連携学会を立ち上げて、学術集会を開催し学会誌を発行する等、目覚ましい活動を行っている。学会は短大とは別組織とはいえ、短大教員が中心となって運営しているもので、伝統医療と看護の連携は、斬新な試みといえよう。

こうした仙台赤門短大の魅力をどのように打ち出すか、意図して活動し広報することが重要であろう。

3-2 学生の履修状況と検討課題

学生の履修状況（成績評価）を見ると、困難な課題が山積しているのが見て取れる。特に GPA 値が低い科目群や、授業評価点が低い科目群が多数あり、しかも GPA 値が低く、再試験となる学生数が多い科目に、主要科目がいくつも含まれている（例えば、解剖生理学や成人看護学など）。この理由には、多くの要因が絡むと推察される。教授内容が学生にとって理解しやすいか、試験の作問の問題か、非常勤講師の場合、看護教育に適した専門性を持つ講師であるか等、シラバスの再点検をはじめ多面的に検討する必要があるだろう。

退学者数の多いことも気になる点である。基礎学力の不足による学業不振は、退学につながりやすい。学生の基礎学力には入試のあり方も絡んでくるであろう。また、退学理由の一つに「家族内での悩みから勉学に打ちこめない」がある。学生が進路について改めて熟考し、保護者を含めて協議する機会を設けるなど、短大としての学生支援としての相談機能を充実させる必要があるのかもしれない。

昨今は、発達障害等を持ち支援を必要とする学生が増えてきている。それらの学生の保健室利用やカウンセラーとの相談、精神科受診指導、あるいは学年担任による指導等の必要性が高まることが想像される。また、教員による指導がハラスメントとして認識する学生も増えてきている。これらの実態を適宜把握し教員間で情報共有し、きめ細かな学生支援の体制を整備することが課題となろう。

正規の授業科目ではないホームルームは、現状では連絡の時間、あるいは学長アワーとして活用されているようであるが、課程の正規科目に位置づけ、学生が主体的に企画できるコマも盛り込める科目に発展させることを検討してはどうか。

3-3 今後も努力を継続し、質の維持・向上を期待する事項

学生のための広報活動として、高校への出前授業や短大会場でのオープンキャンパスなどには、積極的に取り組まれている。初めての卒業生の看護師国家試験合格率は89%で、改善が望まれるが、卒業生のほぼ全員が地域の中核的な病院に就職できたことなど、入学から卒後の進路まで、全体としてきめ細やかな対応がなされていると判断できる。

教員の研究支援はFD等で対応されているが、研究時間の確保、研究力の一層の向上は今後の課題である。一人一人の教員の教育・研究・地域貢献等に関する計画を提出するなど、意識的に取り組むための動機付けを継続することが期待される。

管理運営についても、特に問題はない。尤も、教員数が少ない割に委員会数が多く、教員の負担が大きいのは、どこの大学にも共通した課題であるものの、徐々に良いあり方を検討してほしい。

情報公開は適切と判断するが、受験生の情報入手方法は Web が中心であることから、特に新型コロナウイルス感染症の拡大時期には、ホームページの適時更新が重要と思われる。

3-4 恒常的に第三者からの助言を受ける体制整備の勧め

今回の学外委員による評価を契機として、外部の識者から意見を頂く「大学運営協議会」のような組織を設置することを検討してはどうか。7年に一度、第三者評価（認証評価）を受けなければならないが、今後の大学はより一層、遵法性と公開性を求められており、継続的に、客観的な助言を得られる体制について検討することを勧める。

第2部 自己点検報告書

第2部 目次

はじめに

第I章 沿革・理念・目的・概要 (本文内資料1～5、別添資料1)

第II章 教育組織、教員組織 (本文内資料6)

第III章 教育内容・方法 (臨地実習を含む)
(本文内資料7、8、別添資料2, 3)

第IV章 学生の履修状況 (本文内資料9～13)

第V章 学生の受け入れと卒後の進路
(本文内資料14～19、別添資料4)

第VI章 学生生活 (本文内資料20～25、別添資料5)

第VII章 国家試験対策 (本文内資料26、別添資料6)

第VIII章 教員の研究状況 (本文内資料27～31、別添資料7)

第IX章 社会貢献 (本文内資料32～34、別添資料8～11)

第X章 図書・電子媒体 (本文内資料35)

第XI章 管理運営 (本文内資料36)

第XII章 事務組織・情報公開 (本文内資料37)

第XIII章 新型コロナウイルス対応 (別添資料12)

本文内の資料

資料 1～資料 37

一部分は本文内に挿入し、大部分は本文の巻末にまとめて掲載した。

本文外に添付の別添資料 一覧

- 別添資料 1 大学案内 2021 年版
- 別添資料 2 1, 2, 3 年生用、それぞれのシラバス
- 別添資料 3 臨地実習 共通要項
- 別添資料 4 2021 年度 学生募集要項
- 別添資料 5 学生便覧
- 別添資料 6 国試対策の実施状況
- 別添資料 7 教員の研究活動 詳細
- 別添資料 8 まちかど保健室 活動報告 2018 年度
- 別添資料 9 まちかど保健室 論文
- 別添資料 10 日本伝統医療看護連携学会、第 1 回、第 2 回大会の抄録集
- 別添資料 11 「伝統医療看護連携研究」第 1 巻第 1 号 2020 年
- 別添資料 12 コロナ禍への対応

はじめに

仙台赤門短期大学（以下、特に断る必要がない場合は、短大と略記する）は、2020年度（令和2年度）に初めて、5か年にわたる中期目標・中期計画を策定した（資料1）。その初年度である2020年度に計画された実施項目の1つが、自己点検・自己評価である。これは2020年度が、短大が開学して3年目、完成年度に当たることから、振り返り、自己点検するにふさわしい時点と判断したからである。その点検・評価の結果は、完成後の本学運営に資するものである。

第I章 沿革・理念・目的・概要

（1）沿革

仙台赤門短期大学看護学科は、2018年（平成30年）4月1日に開学した、新設の私立短大であり、擁する学科は看護学科の単一である。1学年の入学定員は80名、3年制で収容人数は240名である。2017年（平成29年）8月29日、文部科学大臣より、設置を認可されたもので、学校法人赤門宏志学院が設置主体である。校舎は、宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-41に位置する。開学以来、3年が経過し、2021年（令和3年）3月に初めての卒業生を社会に送り出し、短大として一応の完成を見た。

（2）理念・目的（3つのポリシー）

宮城県を中心に広く東北地方を念頭に、地域社会・地方の医療・看護に貢献できる、基盤的な人材の育成を目的として、本学は設置された。その実現のために、教育理念・アドミッションポリシー・ディプロマポリシーを定め、開学以来、掲げてきた（資料2）。

理念・ポリシーは、やや長文であるため、それらの標語化を試み、「キャッチコピー」と「ロゴマーク」を制定した（資料3と4）。いずれも、全教員が議論に参加し、練り上げたものである。「キャッチコピー」は「東洋医学と拓く、地域に生きる新しい看護」であるが、学校法人赤門宏志学院は元来、東洋医学を教授する専門学校を経営してきた経緯があり、得意とする東洋医学との連携を本学としても視野に入れていることから、また本学のユニークさを表出したいとの思いがあることに由来する。また、地域への貢献を謳っている。

次に「ロゴマーク」は、尊厳（学生自身が自己肯定感を持ち、ケア対象者への人間としての尊厳・人権尊重を大切にすること）、自立（自分自身のことを自分で統制・コントロール（自律）して、専門職としての知識や技術を習得すること）、融和（看護職としての独自性ととも、他職種とも協調連携できること）の3つ

を象徴するデザインを考案した。マークは、入学式・卒業式では、校旗にしつらえて掲揚している。

なお、当初に採用したポリシーは長文であることに加え、やや難解な表現が目立つことから、2021年1月の教授会にて、より平易な表現に改めて制定し直した（資料5）。ただし、内容的・質的には、当初の精神と変わりはない。より詳しい説明は、以下のとおりである。即ち、「教育理念」は従前とかわらず、現在も、従来の文章と同一である。3つのポリシーについては、改訂前のポリシーには、余りにも多くの抽象理念的な事項が、重複しつつ詰め込まれており、入学する前から、卒業する前から、既に理想の看護師が出来上がっていないと、入学も卒業もできない風な印象であった。そこで今回、改訂に至ったわけであるが、改訂の方針は、（1）より平易な文章に書き改め、生徒・学生が理解しやすいようにした。（2）入学者には、勉学への熱意と看護師への志のみを求めた（アドミッション）。在学中の学習においては、基礎・専門基礎・専門・実習科目の名称を挙げて、各々における学びのガイダンスを示し（カリキュラム）、ロゴマークに定めた目標の達成をもって卒業要件とした（ディプロマ）。

（3）本学の概要

本学は、理念や目的を根拠として、短大としての活動を行っているわけであるが、その存在を、受験生を含む学生やその保護者、広く社会一般に周知してもらうため、大学案内を印刷物としてまとめ関係者に配布している（本文外の別添資料1）。また、ホームページも活用している（<https://sendai-akamon.ac.jp/>）。いずれにおいても、短大における授業内容、臨地実習、学生サポート、学生生活、キャンパス紹介、教員紹介などの概要を紹介している。

学生の概要を示すと、1学年80名3学年の収容定員240名のところ、2021年4月1日の時点で、在校生は1年生78名、2年生81名、3年生59名で、計218名である。退学者は、2018年度に2名、2019年度に8名、2020年度に7名、計17名であった。2020年度に初めて、62名の卒業生を出し、うち55名が国家試験に合格し（合格率は89%）、就職した。教職員については、2021年4月1日時点で、教員19名、助手7名、事務員6名である。

資料1 仙台赤門短期大学 中期目標・中期計画 令和2年度（巻末の別紙）

資料2 当初の教育理念、ポリシー（巻末の別紙）

資料3 キャッチコピー（巻末の別紙）

資料4 ロゴマーク（巻末の別紙）

資料5 改訂したポリシー（巻末の別紙）

別添資料1 大学案内 2021年版

第Ⅱ章 教育組織、教員組織

設置計画では、短大に教員 19 名を配置することとしたが、開学時点は 14 名での出発となった。年度を追うごとに、学年が追加されるのでそれに対応すべく、人員の補充を図った。2019 年度は 1 名が中途退職、2020 年度に 3 名が入職、2021 年度に 3 名が入職し、最終的に 2021 年 1 月の時点までに漸く、19 名の構成を達することができた。

19 名の職位の内訳は、教授 4 名、准教授 3 名、講師 6 名、助教 6 名である。教授 1 名は学長を、もう 1 名は学科長を兼任している。教員の年齢は 43 歳から 69 歳まで分布し、平均年齢は 54.3 歳であった。博士号を有する教員は 6 名、修士号取得者は 9 名である。免許資格としては、学長が医師免許を有する以外は、18 名の教員全員が看護師免許を有している。さらに助産師の資格を有する者も 3 名いる。

看護学の各領域の担当は、以下のとおりである。基礎看護学を 4 名（准教授 1 名と講師 3 名、うち修士が 3 名）、成人看護学を 3 名（教授 1 名と助教 2 名、うち博士が 2 名）、高齢者看護学を 2 名（講師 2 名、2 名とも修士）、小児看護学を 2 名（准教授 1 名と助教 1 名、うち博士が 1 名）、母性看護学を 2 名（教授と講師が各 1 名、博士と修士が各 1 名）、精神看護学を 2 名（准教授と助教が各 1 名で、2 名とも修士）、在宅看護学を 3 名（教授 1 名と助教 2 名、うち博士 1 名と修士 1 名）の教員が担当した。

常勤職員としては教員の他に、8 名の助手を定員として設置申請では計画した。2021 年 1 月時点で、7 名が雇用されており、さらに 1 名を補充する必要がある。採用された助手も全員、看護師免許を有していて、看護学教育の補助に当たっている。臨地実習の繁忙期には、非常勤の看護師を雇用し、応援を願ったケースも多々、あった。

なお、看護学の専門分野・統合分野以外の分野である、基礎分野・専門基礎分野のほぼすべての教科は、非常勤講師の先生方をお願いし、担当していただいた。例えば基礎分野で言えば 18 科目のうち 17 科目、専門基礎分野で言えば 19 科目のうち 18 科目を、非常勤講師が担当した（残りの 1 科目ずつは、学長が担当した）。一方、専門分野・統合分野においては、2 科目のみ、非常勤講師が担当した（高齢者看護学概論と災害看護）。科目によっては、特に疾病治療論 I～VI においては、1 科目を多数の講師が講義することもあるので、非常勤講師の全数は、かなりの数となり、50 名を超えている。

短大の運営組織としては、資料 6 の組織図にあるように、学長の下に 7 つの委員会（財務・自己点検自己評価・健康管理・倫理・入試・ハラスメント対策・広報）、学科長の下に 5 つの委員会（教務・実習・国家試験対策・学生・キャリア

支援)を置いている。委員会の目的に応じ、月1回の定例、随時、臨時に、開催し、報告・審議の内容は議事録としてまとめ、記録を保管するとともに、情報共有している。また、学生支援の体制として、各学年ごとに「学年担任」を置き、学生のグループ支援及び個別支援を行っている。全体をカバーしているのは教授会であり、教授・准教授・事務長で構成し、毎月1度の定例で開催している。

資料6 仙台赤門短期大学の組織 (巻末の別紙)

第III章 教育内容・方法

(1) 教科目の概要

3年間の課程で習得すべき、卒業に必要な単位は、総数100単位以上である。それら単位と教科目との関連は、別添資料2「シラバス」の1頁に掲載されている、「授業科目と単位数」の表を参照されたい。また、同シラバスの2頁には、学年進行と教科目内容との関連を、「カリキュラム・ツリー」として示してある。分野ごとの単位数は、以下のとおりである。基礎分野 14単位、専門基礎分野 21単位、専門分野 53単位、統合分野 12単位 (専門分野と統合分野の中に、臨地実習 23単位が含まれる)。選択科目はわずかに2単位で、残り全てが必修の単位で、相当にきつい課程である。なお、2022年度から新カリキュラムに移行することから、学内の教務委員会で新カリの内容検討が行われている。

教科目の中で、他大学にはないユニークな科目として、「人間学」と「東洋医学概論」が挙げられる。「人間学」の講義内容。牧師さんが講師として、成果承認的人間観ではなく、存在承認的人間観について講義。また修道女の方からは、苦しみや死を前にした人間にとっての希望の大切さを、講義していただいている。さらに「東洋医学概論」では、概念の紹介から、現代医学の補完療法としての位置づけ、さらに簡単な手技の紹介まで行っている。また、正規の教科目ではないが、ほぼ毎週、ホームルームの時間をとっており、種々の連絡、あるいは学長自らの授業(学長アワー)等に充当している。2022年度からの新カリキュラムの編成に際し、このホームルームの内容を発展拡充させ、基礎ゼミとして位置付けている。

(2) 臨地実習について

本学は仙台市圏内で最後発の看護系学校であり、実習施設の確保は困難な仕事であった。幸いなことに、県外に求めざるを得なかった施設は1件のみで、他は全て宮城県内に確保することができた。仙台市内、仙台市近郊、宮城県内の遠隔

地の施設が、それぞれ3分の1位の割合であった。遠近に関わらず、受け入れてくださった病院は、地域の基幹とあってよい施設であり、教育に支障をきたすようなことはなかった。また遠隔地方の病院にしてみれば、初めて看護学生の実習を受け入れる機会となり、それにかかる熱意が感じられ、病院と短大の双方にとって有益であった。学生も、仙台市内のみならず、地方における医療に触れる多様な機会を持つことができたと思われる。ただし、遠隔地であれば、交通に係る時間と費用がかさみ、学生・教員双方にとって負担は大きかった。法人からの何らかの支援はあったものの、近隣の施設での受け入れを増やすことが課題である。

実施してきた臨地実習の実情については、実習委員会の総括である資料7、実習施設の一覧は資料8、学生が使用した臨地実習の指針は、別添資料3に掲げた。

資料7 実習委員会総括 (巻末の別紙)

資料8 臨地実習施設 一覧 (巻末の別紙)

別添資料2 1, 2, 3年生、それぞれのシラバス

別添資料3 臨地実習 共通要項

第IV章 学生の履修状況(成績評価)

(1) 学生の成績、GPA値

学年は、前期(4月～9月)と後期(10月～3月)に分けて、授業を実施した。半期の終わりに、各科目の定期試験を行い、主にはその成績をもって、学生の履修達成度を評価した。100点満点の素点は、SABCDに分類・評価し、C以上が合格である。学生一人一人について、各科目のSABCD一覧表を作成し、半期終了ごとに、学生本人と保護者あてに、郵送にて成績を通知した。また、半期に履修したすべての科目について、そのSABCDを数値に換算し、GPA値を算出して、これも学生に通知した。

以下の資料9は、学生全体におけるGPA値の分布を示したものである。2018年度は1年生70人、2019年度は1年生73人と2年生70人を対象に、調査した。1学年を通してのGPA平均値は2.4～2.6で、最大値3.3～3.7と最小値1.0～1.7の間にある。GPA値の幅ごとに、人数を棒グラフで表した図を見ると、2018年度入学生の第1年次、第2年次における成績は、平均値をほぼ中央として、両側に減少する、正規分布に似た分布を示した。それに対し2019年度入学生の1年次成績は、2峰性の分布を示し、成績良好群と不良群とが分離する傾向がみられた。その理由は不明であるが、現象としては興味深い。

なお、GPA・単位・授業時間それぞれの数値に関して、教科目間で不揃いのケ

ースもあり、GPA 値算出の上で問題があるので、今後、講義 1 単位当たりの時間数は一定になるよう、改善していく。さらに、シラバス中の「科目の評価方法」の記載が不統一であるので、教務委員会がシラバス点検を責務とし、改善に努めていきたい。

資料 9 学生の成績 GPA の推移

- ・成績は GPA 値にて評価した。
- ・GPA の算出方法

$$\frac{(S \text{ の単位数} \times 4) + (A \text{ の単位数} \times 3) + (B \text{ の単位数} \times 2) + (C \text{ の単位数} \times 1) + (D \text{ の単位数} \times 0)}{\text{当該学期 (年度) の履修総単位数 (不合格科目を含む)}}$$
 の合計値を、当該学期 (年度) の履修総単位数 (不合格科目を含む) で、除した値を GPA 値とする。

- ・GPA を算出した学生数

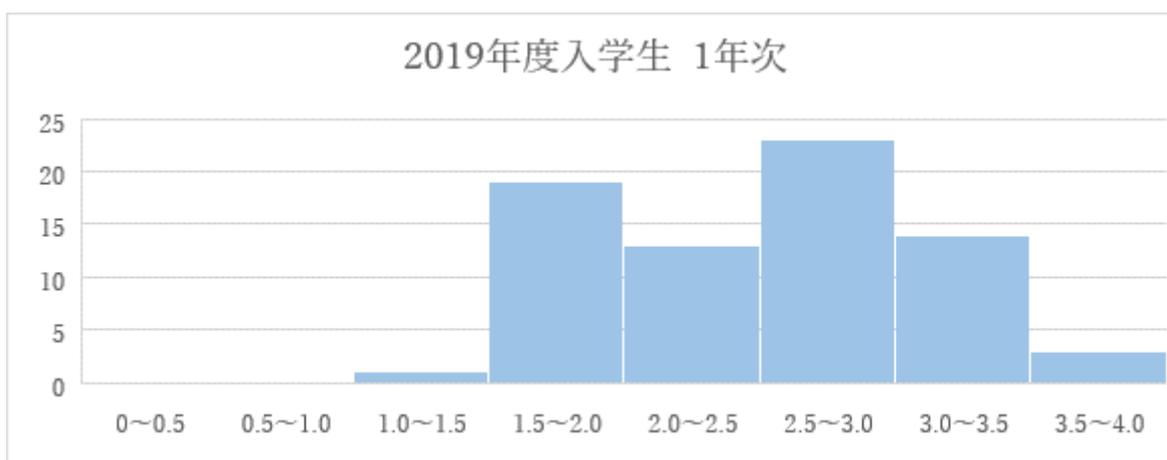
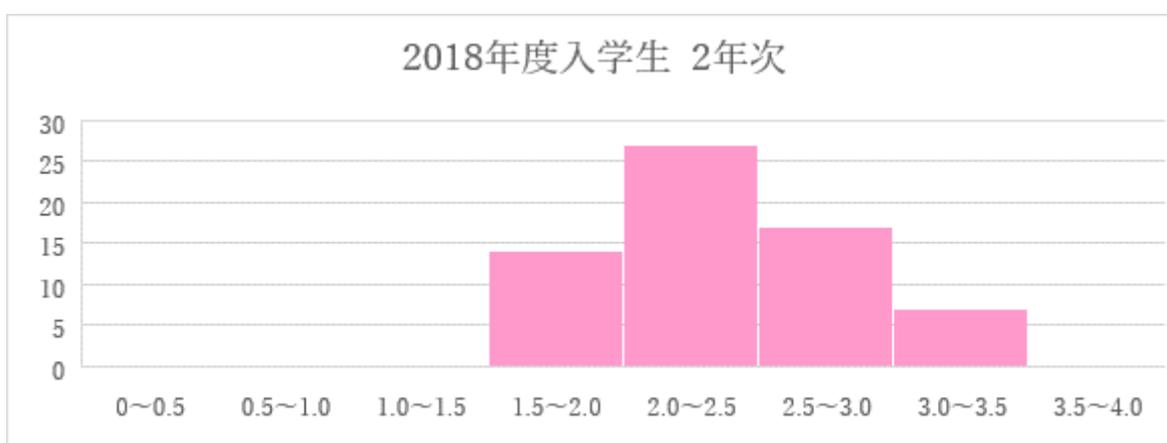
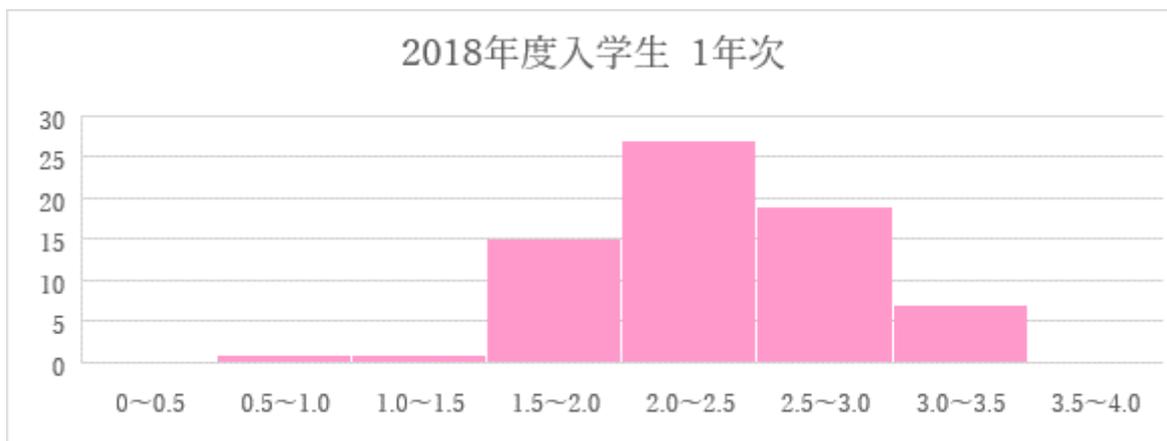
2018 年度 1 年生 : 70 人

2019 年度 1 年生 : 73 人 2 年生 : 70 人

- ・GPA 値の詳細

	2018 年度入学生		2019 年度入学生
	1 年次通算 GPA	2 年次通算 GPA	1 年次通算 GPA
最大値	3.3	3.3	3.7
最小値	1.0	1.7	1.5
平均値	2.4	2.5	2.6
標準偏差	0.47	0.44	0.57

・GPA の分布



(2) 再試験について

上に示した GPA 値は、定期試験の最終成績（点数）をもとに算出している。「最終」の語を付すには、事情がある。つまり、正規の試験 1 回の結果をそのまま採用すると、不合格者が多数に上り、しかも短大の履修課程は極めてタイトであるという制約上、1 科目の不合格は直ちに留年につながる。そんなわけで、再試験の機会を配慮せざるを得ない場面が、多々あったのが現実である。

そこで、再試験の対象となった学生数を示したのが、資料 10 である。教科目によって、再試験対象者数には、大きなばらつきがある（易しい科目と難しい科目の存在）。専門基礎分野で再試験対象者数が 10 名以上（1 学年の学生数 70 余名のうち）であったのは、「人体の構造と機能」「薬理学」「疾病治療論」であった。専門分野においては、「看護学概論」「成人看護学概論」「小児看護学概論」「母性看護学概論」「成人看護学援助論」「小児看護学援助論」であった。いずれの科目も、諸科目の中で、看護学の中核たる科目群であり、その再試験が必要である事実は、憂慮すべき事態といえる。

資料 10 再試験の対象者数 （巻末の別紙）

(3) 教科目の GPA 値

GPA 値とはあくまで、学生の学業達成度を示すものである。しかしながら、GPA 値から、単位数の要素を外すことによって、「教科目ごとの GPA 値」を、算出することが可能である。計算式は、資料 11 にあるとおりである。この教科目の GPA 値は、いわば教科目の難易度の指標ともいえる。GPA 値の高い科目は難度の低い科目、GPA 値の低い科目は、難度の高い科目に相当する。

専門基礎分野で GPA 値の低い（1.6 以下）科目は、「人体の構造と機能」「疾病治療論」であった。専門分野で GPA 値の低い（1.6 以下）科目は、「成人看護学概論」「成人看護学援助論」「高齢者看護学概論」「小児看護学概論」「小児看護学援助論」「母性看護学概論」「在宅看護学概論」であった。GPA 値の低い科目と、再試験対象者数の多い科目には、共通するものが多かった。

再試験が多く、GPA が低い科目群を上列記したが、その要因は科目ごとに異なり、多岐にわたるように思われる、例えば、専門基礎分野の「人体の構造と機能 I, II」は、90 分の授業が合計 60 回にもわたる重厚長大な科目である。したがって、3 名の講師に分担してお願いしてきたが、はなはだ失礼ながら、講師の先生はいずれも、有名国立大学の教授・准教授の方々であるのだが、先生方の教育的力量が人によって大分、異なるようである。また、採用している教科書も影響しているかもしれない。現在は、医学書院発行の系統看護学講座の「解剖生理学」を使用しているのだが、術語も文そのものも厳密性・正確性を重んじていて、

教員が読めば、「なるほど、その通り」なのだが、学生には分かりにくいかもしれない。高校を卒業したばかりの学生であっては、そもそも日本語の読解力が十分とは言えないかもしれず、なおさらであろう。しかしながら、「安直に分かりやすさ第一の教科書でいいのか」という葛藤もあり、悩んでいる。次に、「疾病治療論」であるが、短大の学生といえども一度は、医学部学生が聴講するような、本格的な医学講義を届けたいとの思いから、臨床医学のそれぞれの専門医に講師をお願いしてきている。一人の講師が領域全体の講義を受け持つ場合はまだしも、オムニバスのにならざるを得ない領域もあり、そうすると益々、学生には届かぬ高根の花になってしまう恐れがある。看護学の専門分野にあっては、常勤の教員が担当しているが、試験の作題と採点は科目責任者にお任せしている。すると、どうしても、「甘い」教員と「厳しい」教員とが出てくる。しかも、開設されたばかりの短大であり、教員経験にもばらつきがあり、成績判定が科目責任者の個人的な考えに左右される場面もないではない。ただし、教科目によってばらつきが出るのは、やむを得ないというか、あって当然の様にも思える。教員全員が「甘い」のも、教員全員が「厳しい」のも、また統一を取るために、成績に補正を加えて科目間のばらつきを人為的に無くすのも、いずれも本質的な解決にはならないし、むしろ有害かもしれないからである。

資料 11 教科目の GPA 値 (巻末の別紙)

(4) 授業評価

学期の終わりに、学生全員にアンケート調査を実施し、授業を評価してもらった。10 の質問項目のうち問 1～問 5 は、学生がどのように取り組んだかの主観を、問 6～問 10 は、学生から見て教員・授業がどうであったかを、尋ねている。各質問に対して、5 点(最高点) から 2 点 (最低点) の 4 段階の数値で回答してもらった。学生全員の各教科に関する数値から、問 1～問 5 の平均値と、問 6～問 10 の平均値を求めた (資料 12 を参照)。

専門基礎分野においては、「薬理学」「病態生理学」「リハビリテーション学」の 3 科目では、学生は積極的に取り組み、かつ、学生の教員・授業に対する評価も高かった。専門分野においては、「生活技術援助論」「診療技術援助論」に、学生は真剣に取り組む、かつ、教員・授業への評価も高かった。このように、学生が積極的に取り組んだと主観的に感じている科目では、授業への評価も高い傾向にあったといえそうである。

なお、授業評価は数値による回答ばかりでなく、自由記載もしてもらった。内容は膨大になるので、此处ではまとめきれないが、担当教員に数値もコメントも返し、適宜、授業内容に反映してもらおうなど、役立てている。中には心ない、

読むに堪えないコメントもあり、匿名意見の問題点である。

情報科学の授業評価が低かった原因については、一つには講師の先生の力量不足、もう一つには全般的な話題が多く、看護学とのかかわりが乏しかった点が挙げられる。これらについては、2022年より施行の新カリキュラムにおいて、科目名を「情報科学の基礎」として、講師の交代と内容の一層の具体化を目指している。なお2020年以来のコロナ禍により、学生の「情報」への接し方は激変してきていると思われる。特に遠隔授業が半ば当たり前になったことから、以前は学生の有するIT機器はスマホがほとんどであったのが、現在はノートパソコンとiPadが主流になってきている。情報科学の学習の在り方には、さらなる議論が必要と思われる。

資料12 授業評価 (巻末の別紙)

(5) 退学者

入学した学生が、順調に授業を履修し、そのまま修了・卒業まで到達してくれれば宜しいのであるが、なかなかそうはいかない。資料13に、退学者数の推移を示した。2018年入学の1期生70名は、2年次には68名、3年次には63名に減少し、7名が退学した。2019年入学の2期生73名は、2年次には67名に減少し、7名が退学した。2年を経過する間に、10%以上の学生が退学している。

退学に至る経過では、教員と学生・保護者との面談が、何度か組まれるのが通常である。面談の内容からは、退学の原因は主に2つ、浮かび上がるようである。1つは、純然たる学業不振の結果、段々と意志を喪失する場合である。もう1つは、人間関係、特に家族内での悩みから勉学に打ち込めなくなる場合である。

前学期と後学期の初めの期間に、全学生を対象に、教員が個人面談をしてきた。また、学生から訴えがある場合、あるいは教員が観察していて必要と思った場合には随時、声掛けや面談などで、対応してきている。しかし、家庭内での悩みは、学生からはなかなか発信しがたい心理や事情があるらしく、表面化した時はもうすでに、問題が大きくなりすぎている場合が多かった印象がある。入試においては面接を必須とし、看護師を目指す上でのコミュニケーション能力に注意を払っているのであるが、受験生一人当たり10分の面接では、なかなか人間形成歴までは推測できない。悩みは深い。

資料 13 退学者の人数推移

年度	学年	入学者数 (4/1 時点)	退学者数 (3/31 まで)	留年→ 休学	在籍者数 (3/31 時点)	在籍者 合計
2018	1 年生	70	2	1	68	68
2019	1 年生	73	3	3	70	70
	2 年生	68	5	0	63	63
2020	1 年生	83	1	1	82	82
	2 年生	67	5	1	62	62
	3 年生	63	1	0	62	62

第 V 章 学生の受け入れ、卒後の進路

(1) 学生の受け入れ状況

毎年度 4 月初旬に、学生募集要項を公開し、それに則って受験生のリクルートに努めた。2021 年度の学生募集要項は、別添資料 4 として添付してある。

実際の受験者数：合格者数：入学者数の経緯は、巻末の資料 14 に見られる通り、2018 年度は、119：102：70 名、2019 年度は、128：112：73 名、2020 年度は、143：117：80 名であった。いずれの人数も、年を追うごとに漸増してきたのは、うれしい結果であった。受験者数に対する合格者の割合は 86%、88%、82%、合格者数に対する入学者の割合は 69%、65%、68%であった。これら割合の値は、年度に無関係にほぼ一定であり、入学者の確保・ガイダンスに向けての対応を取りやすいといえる。

AO 入試と推薦入試においては、合格者の大多数がそのまま入学するのに対し、一般入試では、合格者の半数弱しか入学しなかった。結果として、入学者の合格者に対する割合は 70%弱位になった。推薦入試は II 期まで、一般入試は III 期まで実施して、漸く定員を確保できるかどうかの、ギリギリである。教員・事務の負担は大きいのであるが、仙台圏うちで最後発の短大としては、致し方ない状況である。

入学者の内訳では、平均して 90%が女子、10%が男子であった。また、出身地で見ると、仙台市内出身がほぼ半分、残り半分が仙台市以外の宮城県、宮城以外の東北 5 県の出身が占めた。

資料 14 受験者数：合格者数：入学者数の経緯 (巻末の別紙)

別添資料 4 2021 年度の学生募集要項

(2) 学生リクルートのための広報活動

開学前年度・初年度は、とにかく短大の名称を知ってもらうがため、テレビ放映、受験生向け雑誌への広告掲載、駅構内の柱やスクリーン広告、ダイレクト・メールなど、緊急的・広汎的に広報を行った。2年目以降、広報活動はほぼ定常化しつつあり、ホームページ（を見ての資料請求とその送付）、宮城県内の主要高校訪問、高校生への出前授業（巻末の資料 15 を参照）、業者主催説明会への参加、オープンキャンパス（OC）などを実施している。

資料 15 高校生への出前授業（巻末の別紙）

(3) オープンキャンパスについて

OC については、少し詳しく触れる。OC の主催者は短大、即ち、教員ではあるが、短大学生の自主参加が極めて重要な要素である。学生が後輩である受験生に案内をすることで、待遇ばかりか、授業内容の理解にもつながっている。受験生にとっても、学生の立場からのコメントを聞ける得難い機会となっている。資料 16 に、OC の開催日と、参加者数（生徒、保護者）を示す。また、2020 年 8 月 22 日に開催された OC の実際の状況については、巻末の資料 17、18 に示す。

資料 16 オープンキャンパスの開催日と参加者数（生徒、保護者）

2018 年度（全 6 回）

- 6 月 15 日 学生 55 名 保護者不明
- 7 月 28 日 午前・学生 50 名 保護者 34 名 午後・学生 28 名 保護者 18 名
- 8 月 11 日 午前・学生 34 名 保護者 23 名 午後・学生 21 名 保護者 12 名
- 9 月 29 日 学生 38 名 保護者 20 名
- 10 月 13 日 学生 11 名 保護者 4 名
- 2019 年 3 月 16 日 学生 29 名 保護者 20 名

2019 年度（全 5 回…10 月は台風 19 号により中止、3 月は新型コロナウイルスによる影響で中止）

- 5 月 25 日 学生 31 名 保護者 12 名
- 6 月 29 日 学生 44 名 保護者 18 名
- 7 月 20 日 学生 77 名 保護者 30 名
- 8 月 24 日 学生 63 名 保護者 27 名
- 9 月 14 日 学生 21 名 保護者 7 名

2020 年度（全 3 回…6 月は新型コロナウイルスによる影響で中止。2021 年 3 月

はこれから開催予定)

- 7月23日 学生65名 保護者34名 (新型コロナウイルス感染拡大防止による学生65名予約制限により締め切り前に募集停止)
- 8月22日 学生65名 保護者31名 (新型コロナウイルス感染拡大防止による学生65名予約制限により締め切り前に募集停止)
- 9月12日 学生48名 保護者30名 (学生65名予約制限内にて予定通りの日時で募集締め切り)

資料17 OCのプログラム (巻末の別紙)

資料18 OC実施のための教職員・学生の役割分担表 (巻末の別紙)

オープンキャンパスの総括

OCプロジェクト・リーダー 佐藤浩一郎

開学の1年目においては、学生が一学年だけの少人数であったが、計画から実施に至るまで学生主体での手作り作業を豊かに開催された。アンケートからは、新鮮で活発な雰囲気であったという内容であった。

2年目では、二学年が揃い、教員主体での開催で展開した。各ブースにおける体験学習や模擬授業を、各教員の当短大の個性を活かしたメニューを見出し、創造性豊かに開催できた。さらに東洋医学による外部講師や、大学説明会から個別相談まで、1年目より拡大して行った。参加人数も高校生と家族、社会人等前年度より増加した。

3年目では全学年が揃い、動画やWEBオープンキャンパス体験もあらたに追加となった。コロナ禍の影響から6月開催は中止せざるを得なくなり、7月以降も人数制限や体験学習から見学ツアー等変更せざるを得ない状況であった。だが、人数制限を超える予約申し込みであったり、内容も各短時間を意識してブースを増やしたりと例年のメニューを変更し開催した。アンケートの結果をふり返っても、「将来の夢を実現できそうで魅力的」「授業や実習など学内の教育が魅力的」等の点数が高く、盛況裡での内容であった。

尚、受験者数も毎年増加に転じており、面接ではオープンキャンパスに参加をして入学を決めたという内容も目立った。

(4) 2021年度国家試験合格者数、合格率

2020年度に短大は初めて62名の卒業生を出し、うち55名が国家試験に合格した(合格率は89%)。

(5) 卒業後の進路について

学生の卒業後の進路については、キャリア支援委員会を設け、学生のサポートを行った。資料 19 に、委員会委員長の総括を掲げる。なお、2021 年 3 月末の時点で、62 名の卒業生のうち、55 名が国家試験に合格し就職した。不合格となった 7 名のうち、5 名は国家試験再受験を目指して浪人生に、1 名は進学希望で受験浪人に、1 名は看護師を断念してそれ以外の就職を目指すこととなった。

資料 19 キャリア支援委員会 活動総括（巻末の別紙）

第 VI 章 学生生活

(1) 学生生活全般

学生生活全般について、その手引きを学生便覧にまとめ、印刷物として、入学時に配布しているので、参照されたい。

別添資料 5 学生便覧

(2) 奨学金、通学方法

学生の得ている奨学金のうち、日本学生支援機構を介するものは、短大事務が把握しており、その内容は巻末の資料 20 に示すとおりである。2018 年度入学生は 70 名中 49 名、2019 年度入学生は 73 名中 51 名と、70%の学生が貸与されている。一方、2020 年度入学生については、入学者 83 名の全員が貸与を受けている。さらに 2020 年度からは、文科省の修学支援制度が発足したことにより、在校生 206 名中 33 名、16%の学生が給付を受けている。修学支援制度を利用すれば、月々の給付奨学金に加え、入学金・授業料の免除・減額が受けられる。なお、学生は日本学生支援機構以外からも、奨学金を得ている場合がある。地方自治体、病院などからの奨学金であるが、短大が全てを把握しているわけではないので、此处では触れない。

2020 年度の在校生 206 名の通学方法は、資料 21 のとおりである。JR が 85 名、地下鉄が 167 名、自家用車が 33 名などであった。最寄りの地下鉄、青葉山から短大までは、法人がスクールバスを運行し（乗車時間は 5 分）、学生の利便を図っている。

資料 20 奨学金（巻末の別紙）

資料 21 通学方法（巻末の別紙）

(3) 課外活動

学生の、同好会を含む課外活動などについては、学生委員会が担当した。

資料 22 学生委員会 総括 (巻末の別紙)

(4) 学生の健康管理

学生は毎年度当初、4月初めに健康診断を受けなければならない。健診の項目と、受診状況は巻末の資料 23 に示した。その結果、毎年、数名は医師からの指示(要、精密検査など)を受けている。健診の折に学生が申告している、既往歴・現症について取りまとめたリストを準備したが(情報は非公開)、疾患保有率の高さ、疾患の多彩さに驚かざるを得ない。この疾患記載は、学生の勉学を含む日常生活の指導をするうえで、極めて重要な(知らないと、不都合を生じかねない)情報であった。

健診の際には採血も行い、感染症の幾つかに関して、抗体価検査を実施している。これは、看護学生が臨地実習に出向く際に、受け入れ病院から感染防御の徹底を要求されているためである。B型肝炎(学生自身の防御)と学校感染症(小児実習に際し学生が感染源とならないための防御)に対する抗体価検査が含まれる。抗体価が不十分な場合には、ワクチン接種を受けることになるが、資料 24 は、ワクチン接種状況を示している。

青年期にある学生は、心理的には未だ円熟しているとはいえ、悩みを抱える時期である。そのため、臨床心理士の先生をカウンセラーにお願いし、2カ月に一度の頻度で、来校してもらい、悩みを抱える学生の相談に乗ってもらった。1回の相談に、1~2名の学生が訪れた(資料 25)。保健室は年間を通じて学生が利用しているが、学期の初め、特に5月6月に多かった。身体の不調によることが多いのだが、心理的不調(極度の緊張とか不安など)も見られた。学生の悩みということでは、家族との間での葛藤を抱えていて、支援を必要とする学生が多いのは確かである。しかしその原因が、学生の発達障害によるのか、家庭環境のなせる業なのかは、よく分からない。

以上、学生の健康管理全般にわたって、校医の先生をお願いし、半年に一度、短大の健康管理委員と、健康管理会議を開催して、状況の把握と検討を行った。

資料 23 健康診断 (巻末の別紙)

資料 24 ワクチン接種 (巻末の別紙)

資料 25 カウンセリング (巻末の別紙)

第 VII 章 国家試験対策

看護学生は過程を履修して卒業すれば、看護師国家試験（以下、国試と略記する）受験資格を与えられる。しかしながら、正規の授業を受けただけで国試に直ちに合格できるわけではないのがほとんどの学生であるから、また、予備校・塾に通ってもらうのも学生の保護者にとっては大きな負担となることでもあり、短大教員は、正規授業以外にも、膨大な時間と労力を投じて、学生の国試対策を支援することとなった。別添資料 6 に、短大の国試対策委員会が中心になって実施した、国試対策の具体的内容をまとめてある。また資料 26 は、対策を実施してみての、国試対策委員長の総括文書である。

資料 26 国試対策委員会 総括（巻末の別紙）
別添資料 6 国試対策の実施状況

第 VIII 章 教員の研究状況

（1）教員の研究活動

本学は短期大学であることから、教育に重点を置いてはいるが、高等教育機関なのだから、教員のレベル向上には、研究活動の裏付けが欠かせないとの認識から、研究にも十分に意を用いるよう、配慮した。第 II 章でも述べたように、教員 19 名のうち、博士号を有する教員は 6 名、修士号取得者は 9 名であるが、そのほかにも現在、大学院博士課程に在籍が 3 名、修士課程に在籍が 3 名いる（この中で、2021 年 3 月に 1 名が博士号を、1 名が修士号を取得）。数年以内には、全教員が修士号以上を取得済であることを目指している。さらに助手 7 名のうち 2 名が修士課程に在学中である。

教員の研究活動の具体例は、原著論文、学会発表、各種印刷物（総説・著書・教科書・辞典・報告書など）、講演、学会・協会などでの役職の区分ごとに記載し、詳細を網羅して別添資料 7 に掲載した。また、各人の該当件数を区分ごとに集計したまとめが、巻末の資料 27 である。収集の対象期間は、短大が開学して以降から現在まで、すなわち 2018 年～2020 年である。3 年間を通じて短大全体の総数は、原著論文 31 報、学会発表 127 件、各種印刷物 26 件、講演 70 件であった。

なお研究時間については、短大では確かに教育の比重が大きいのであるが、裁量労働制を活かして、研究にも注力できるよう、教員の自助努力も望まれる。法人からは、教員 1 人当たり年間 30 万円の研究費が支給された。その前提として、毎年度初めに、前年度の研究進展状況と当該年度の研究計画を、提出することを

義務付けている。

資料 27 教員の研究活動 まとめ (巻末の別紙)

別添資料 7 教員の研究活動 詳細

(2) 外部資金の獲得状況

科学研究費補助金をはじめとする外部研究資金の申請・獲得状況は、巻末の資料 28、29 にまとめてある。教員 19 名の組織で、科研費代表者が 4 名、分担者が 4 名であった。科研費申請も毎年、5～6 件であった。なお、短大の学校法人から教員全員に、1 名あたり、30 万円の研究費が支給されており、外部資金以外でも、教員の研究活動が遂行できるよう、配慮された。

資料 28 外部資金獲得状況 (巻末の別紙)

資料 29 科学研究費補助金の申請・採択状況 (巻末の別紙)

(3) 研究の倫理審査

研究遂行のための前提条件として、研究の倫理面での配慮が求められている。そこで短大内に倫理委員会を設置し、研究者から提出された研究倫理申請書を審議した。巻末の資料 30 を参照されたい。倫理委員会の開催は、2019 年度は 6 回、2020 年度は 10 回であった。また、承認された研究課題は、2018 年度は 1 件、2019 年度は 2 件、2020 年度は 5 件であった。

資料 30 倫理審査 (巻末の別紙)

(4) FD 研修

教員の研修会 (FD) の開催は、2018 年度 4 回、2019 年度 6 回、2020 年度 4 回であった。FD の日時・講師・研修題目は、巻末の資料 31 に記載してある。また、FSDS 担当教員の総括を、以下に掲げる。なお仙台市内には 4 年制の大学が 4 校あり、看護学の教員をお呼びして、講演・討論を活発にしたいと考えている。

資料 31 FSDS (巻末の別紙)

FSDの総括

FSD担当 小野八千代

2018年1月～2020年12月31日までに14回のFD/SDを開催した。

当初は教員のみでの参加であったが、事務と関連のあるテーマの時は、事務職員（1名）も合流した。教職員の参加率は平均8割程度（20名位）であった。

テーマ・内容に関しては、大学の教育・研究・運営について必要な事柄をバランス良く取り入れられている。仙台赤門短期大学開設当初には、開設当初に必要な内容を取り入れた。また、世の中の流れに沿ったテーマ・内容をタイムリーに取り入れた。例えば、新型コロナウイルス感染拡大時には、新型コロナウイルス感染に関しての内容を取り入れた。テーマ・内容に関しては良かったと思われる。

講師招聘については、仙台赤門短期大学と関連のある身近で、専門性の高い講師を招聘した。仙台赤門短期大学と同じ敷地内に併設されている赤門鍼灸柔道専門学校を招聘することで、様々な情報を共有することもできた。講師招聘についても良かったと思われる。

今後、工夫が必要かもしれないと思われる点は、参加できなかった教員にFD/SDでの資料を後日配布するかたちをとっていたが、より多くの教員が出席できるように何らかの工夫が必要かもしれない。

第IX章 社会貢献

（1）「地域貢献プロジェクト」の立ち上げと活動

委員会組織ではないが、短大内に「地域貢献プロジェクト」を組織して、社会貢献活動を行った。プロジェクトのチーム・リーダーが起草した総括を以下に掲載する。文章内にある「赤門まちかど保健室」は、短大の属する学校法人が、仙台市郊外に位置する短大校舎とは別に、市の繁華街に所有する校舎の一角を利用して、開設したものである。

「地域貢献プロジェクト」総括 地域貢献プロジェクト・リーダー 大沼由香

2018年度開学直後から、本学の社会貢献活動として「地域貢献プロジェクト」を発足し、同年10月から「赤門まちかど保健室」活動を開始し、週1回国分町校舎で相談事業を行った。看護学科の全教員が担当し、保健室に立ち寄った地域住民との気軽な会話の中で保健医療福祉に関する様々な相談に対応した。保健室活動は2018年度22回130人来室、2019年度は17回96人来室した。おしゃべりのなかで相談が深まることもあり、深刻な内容で地域包括支援センターに紹介するなど具体的な連携活動をおこなった事例もあった。2019年度は健康講座も開催し、9講座、参加者数は156人であった。健康講座から鍼灸治療院受診

へとつながった事例もあり活動の意義は大きい。また健康講座にはボランティアとして学生の参加もあった。

2019年度から学都仙台コンソーシアムに加入し、サテライトキャンパス市民公開講座を7講座、開講した。受講者アンケートでは講座内容の理解度、満足度とも高評価であった。

2020年度は新型コロナウイルス流行により、赤門まちかど保健室、サテライトキャンパスともに活動休止となったのが残念であった。開学当初から全教員が参加し地域貢献活動に取り組み、短大としての地域貢献の基盤構築や、地域住民の保健医療に関するニーズ把握にもつながった。今後は学生の参加機会を増やし、住民支援の学習機会としての活用もおこないたい。

(2) まちかど保健室の活動

まちかど保健室の活動状況を、2018年度については別添資料8に、2019年度については巻末の資料32に示す。さらに、活動状況を論文にまとめ発表したのもので、それを別添資料9として示す。

資料32 まちかど保健室 2019年度活動報告

別添資料8 まちかど保健室 2018年度活動状況

別添資料9 街角保健室 論文

(3) 学都仙台コンソーシアムへの参加と活動

仙台市内の大学・短大の連携組織である学都仙台コンソーシアムには、2019年4月から参加した。2019年度は、コンソーシアムの主催する公開講座に、合計7回、短大より講師を派遣した。聴講参加の市民の数は、延べ320人であった。巻末の資料33を参照のこと。2020年度は、新型コロナウイルスの影響により、公開講座は中止となった。

資料33 仙台コンソーシアムへの講師派遣 一覧 (巻末の別紙)

(1) 日本伝統医療看護連携学会の立ち上げと学会活動

本短大の所属する学校法人は元々、鍼灸指圧師・柔道整復師を養成する専門学校を長らく経営してきた。専門学校と短大とは、隣接する敷地に立地していること、看護学と東洋医学の間には共通する思想的要素もありそうなこと、近未来の看護ではますます在宅看護が重視されること、などを踏まえ、伝統医療と看護学との連携の可能性を探るため、短大・専門学校の教員を中心に2019年、「日本伝統医療看護連携学会」を立ち上げた。学会発足にあたっての学会長(短大学長)の、

設立趣意書と会長挨拶を巻末の資料 34 に掲載する。そして 2019 年・2010 年には、第 1 回・第 2 回の大会を開催した。第 2 回大会は、新型コロナウイルスの影響で、WEB 開催となった。次いで、学会誌である「伝統医療看護連携研究」第 1 巻第 1 号を、発刊した。大会の抄録集と学会誌は、別添資料 10、11 に掲載した。

資料 34 日本伝統医療看護連携学会 (巻末の別紙)

別添資料 10 日本伝統医療看護連携学会、第 1 回、第 2 回大会の抄録集

別添資料 11 「伝統医療看護連携研究」第 1 巻第 1 号 2020 年

第 X 章 図書・電子媒体

短大が開学時に図書室の準備した蔵書(主に単行本で、学生用参考書が中心)は、4,151 点であった。看護関係の雑誌は、5 冊ほど購読した。データベースについては、契約内容と利用実績は以下の資料 35 のとおりである。2020 年における医中誌 Web と最新看護索引の利用が、2019 年のほぼ 2 倍に増加したのは、第 1 期生が最終学年に進み、看護研究の授業で活用したためと思われる。

資料 35 データベース

メディカルオンライン ; 600 件の文献ダウンロード

2019 年実績 580 件

2020 年実績 362 件 (～12 月まで)

医中誌 Web ; 同時アクセス数 2

2019 年実績 1,765 件

2020 年実績 3,423 件 (～12 月まで)

最新看護索引 ; 同時アクセス数 1

2019 年実績 23 件

2020 年実績 237 件 (～12 月まで)

第 XI 章 管理運営

短大の管理運営は、教授会が担った。教授会の構成員は、学長・学科長を含む教授、准教授と事務長である。毎月 1 回、定例で会合を持ったほか、緊急などの場合には臨時で開催した。また、形式的に進めてもよい内容は、メール審議での開催もあった。教授会は学長が議長を務めた。

教授会には、10 の各種委員会が附属し、5 つは学長が主催し学長が委員長を務めた。残り 5 つの委員会は学科長が管轄したが、委員長は教員の中から選出

した。いずれの委員会も委員会規定があり、所掌内容に関して議論し、決定し、遂行し、総括した。2020年度の、委員会の構成委員を巻末の資料36として掲載する。これを見てわかるのは、教員数が19名と少数であるにもかかわらず、やらねばならぬ委員会事項は多く、結局、教員は3つほどの委員会を掛け持ちせねばならなかった。そして、委員長の負担は大きく、特に内容的に重い教務・実習・国試対策・キャリア支援などの委員会委員長は、苦勞が絶えなかった。

管理運営への参画は、教育や研究面での貢献と並んで、教員評価や人事考課をする際の指標となりうると考えられる。しかし管理運営への貢献は、受け持ち授業のコマ数や研究論文の数のように、明瞭には自覚できないものようである。よって今後は、各教員が任に当たった委員長・副委員長や学年主任・副主任の種類・年数なども、できる限り定量化して教員に明示するのが良いかもしれない。

資料 36 2020年度 委員会一覧と構成委員 (巻末の別紙)

第 XII 章 事務組織と情報公開

短大の事務部は、事務長のもと、総務係3名、教務係2名、学生係1名の計6名で担当している。この6名という人数は、短大の設置認可申請計画に示した人数と同数であり、充足している。但し、1名は開校時間の関係で、変則な勤務時間設定(11時30分より20時15分)であり、午前中に人手不足が生じやすい。専任又は兼任の職員の増員を検討している。各係の業務内容は、巻末の資料37に示すとおりである。

情報公開については、現在、短大ホームページで、学則・シラバス・学生便覧・教授会規定・研究に関わる不正防止の取組などについて、公開している。なお、法人の情報(役員・財務諸表等)については法人ホームページにて公開している。

資料 37 事務組織と業務内容 (巻末の別紙)

第 XIII 章 新型コロナウイルス流行への対応

2020年度は、その開始時期からコロナ禍に見舞われ、授業形態・臨地実習・学生生活は、甚大な影響を被った。4月から12月までに、短大のとした対応についてまとめて報告したので、別添資料12として再掲する。

別添資料 12 コロナ禍への対応